

今井祇園祭をめぐる記憶と実践

キーワード：祭り、記憶、実践、存続、人生と語り

人間共生システム専攻

森田 祥平

1. はじめに

本論は、福岡県行橋市大字今井・元永周辺にて伝承されている今井祇園祭を研究対象としている。本論で取り扱う今井祇園祭に関するデータは、主に調査期間である2009年6月頃から2010年末に至る祭礼期間中(7月第二週の日曜日から8月第一週の月曜日まで)のフィールドワークや、単発で行われた聞き取り調査に由来する。

今井祇園祭は鎌倉時代からの長い歴史を持ち、江戸時代には豊前地方で最も大きな祭りのひとつに数えられ、かつては小倉祇園太鼓・中津祇園と並び、「豊前三大祇園」と呼ばれたほどである。また、規模だけではなく祭りで巡行する山車も豊前最大級であるといわれている。しかし過去において栄華を誇った祭りには、第二次大戦後から現在に至るまで、関係地域や見物人、さらには担い手たちの減少が認められる。かつては多くの地域に担われていた祭りであるが、現在では今井区の今井西町のみが直接的な祭りの担い手となっている。このような状況の中で祭りの担い手たちの負担は増加し、彼らの間からは「祭りはキツイ」という言葉もよく聞く。しかしいくら負担が増えようとも、彼らの口からは「祭りを止めたい」という言葉は出て来なかった。それどころか途絶えた行事の復活や、組織の改編など、祭りを存続させるための工夫が祭りの随所で施されていた。さらにかつて祭りから撤退した元永では、山笠の復興を目指した活動が認められる。

以上のような状況を目にした時に、「なぜ今井祇園祭は今日まで続いているのか」という問いが浮上した。そこで本論ではこの問いを考察するために、実践と記憶という二つの軸を設定する。つまり過去から現在に至るまでの今井祇園祭の変遷を人びとの具体的な実践を対象として考察し、過去と現在とを繋ぐものとして人びとの記憶を対象とした考察を行う。これらの考察を通して、「なぜ今井祇園祭は今日まで続いているのか」という問いに答えたい。

なお、今井祇園祭をめぐる先行研究は、主にその歴史的な起源とその変遷や、儀礼構成などを中心として

記述されたものが多く、人びとの経験の領域に踏み込んだものはほとんどない。従って本論の今井祇園祭研究史上の意義として「人びとの経験に足を踏み込む」ということが挙げられる。

以上を踏まえた上で、まず第1章では今井祇園祭の歴史的なあゆみと現在の祭りの流れ及び儀礼構成を記述し、この祭りが辿ってきた経緯とその中で被ってきた変化、そして現在の立ち位置を確認する。次に第2章では、1960年代以降から現在に至るまでの今井祇園祭が、具体的にどのような実践に支えられてきたのかということ、主に今井西町の住人たちと元永山笠復興会を例に考察する。そして第3章では、現在の担い手たちの小学生頃の記憶を基に、1950年代後半から1960年代半ばくらいの今井祇園祭が、当時の住人たちによっていかに経験されていたのかということを示す。その後、現在の住人たちが小学生時代に経験した今井祇園祭から、どのような人生を辿ってきたのかということ、今井西町の住人三人を事例に考察する。最後に終章では、本論のまとめと反省を行う。

2. 今井祇園祭の歴史と現在

本章では、今井祇園祭の過去と現在の概観を目的とする。祭りの主要な儀礼は①山車②奉納連歌③八ツ撥行事を中心として構成されている。祭礼期間は、7月第2週目の日曜日から8月最初の日曜日までのおよそ20日間である。主要な担い手は現在、今井西町であるが、過去においては今井東町や元永なども祭りを担っていた。今井東町は現在唯一の担い手である今井西町と共に1960年代まで祭りを行っていた。また戦時中に祭りから撤退した元永では、現在、山笠の復興を目指した活動が認められる。

今井祇園祭の奉納先である今井津須佐神社は、港湾都市として栄えた今井津における疫病の恐怖を基礎として、鎌倉期1254年(建長7)に京都祇園社から勧請された。祇園社が勧請された翌年には、すでに簡単な山車が作成され、神事が行われていたといわれている。以降、山車を用いた神事は現在まで続く。そして1530

年(享祿 3)には、今井祇園祭に連歌が加わった。稚児を神社へと奉納する八ツ撥行事の発生した時期は定かではないが、1747年(延享 4)には八ツ撥の語源が記された札が残っており、少なくとも江戸期には行われていたと考えられる。

また江戸期には小倉幕府との結びつきを得て、今井祇園祭は北部九州を代表する巨大な祭へと発展したが、幕末の小倉藩解体により祭りの政治的・財政的な基盤は、縮小を余儀なくされた。ただし、その当時に確立された信仰的な基盤は衰えなかった。というのも、明治から戦後にかけては、山笠を奉納していた元永地区の祭りからの撤退などの変化にも関わらず、大祭二日目の参詣行事である夜祇園には数十万の人手が今井津須佐神社に詣でていたという記録が残っているからである。

しかし 1960年代には、当時今井祇園祭を担っていた町の一つである今井東町が祭りから撤退し、それに伴い今井西町・今井東町とで行っていた八ツ撥行事が中断された。以降、担い手の減少などが重なり、現在では今井祇園祭はかつての盛況を失っている。それでもなお、担い手たちは、祭りをただ縮小するままたまかせるだけではない。例えば、今井西町では地元の知識人が主導になり八ツ撥行事の復活が行われた。他にも同町は、組織の改編などを行っている。さらに、かつて祭りから撤退した元永では、元永山笠復興会が組織され元永山笠の復活に向けた新たな実践が生まれている。

以上のように、今井祇園祭は過去には大変な盛況を誇っていたが、現在はその規模は縮小傾向にあり、その過程として担い手たちへの負担は増加している。しかし今井祇園祭には、一度中断した八ツ撥行事の復活や、かつて祭りから撤退した元永における元永山笠復興会の結成など、存続に向けた実践も認められる。

3. 今井祇園祭をめぐる実践

本章では、今井祇園祭が現在に至るまで具体的にどのような実践に支えられてきたのかということの考察を目的としている。そのために 1960年代以降にみられる今井祇園祭をめぐる人びとの実践とその変化の過程を、特に地元の知識人やリーダーの実践に注目の力点を置き、記述した。

第 1 章でも述べたことだが、1960年代に入り、今井祇園祭を担っていた町の一つである今井東町が山車の

破損を理由に祭りから撤退した。これを期に、今井祇園祭に一連の変化が訪れる。当時、今井東町と今井西町とは八ツ撥行事を共に担っていた。しかし、今井東町が祭りから八ツ撥行事を含め全面的に撤退したことにより、今井西町でも八ツ撥行事が行われなくなった。それと関連して、今井西町にて八ツ撥行事の担当などを主な役割としていた小若衆や青年会などの組織が、組織されなくなった。これらの事例より、当時の今井祇園祭をめぐる人びとの実践が相互に絡み合っていたことができる。

このように一度途絶えた八ツ撥行事であったが、およそ 20 年後の 1986 年(昭和 61)に、地元の知識人・橋本幸作氏の行動により復活することになる。橋本幸作氏(75)は 1935 年(昭和 10)に今井西町で生まれる。彼は、元々、考古学や郷土史に関心を持っており、就職先の会社では 1972 年(昭和 32)から考古学サークルに所属していた。しかし集団調査を基本とする考古学を学ぶ中で、個人で調査を行いたいという想いを募らせた。丁度その時に、1975 年(昭和 35)行橋市にて、美夜古郷土史学校が、郷土史を一般市民たちに解放しようという流れの中で、開設された。かねてからの郷土史や民俗学への関心もあり、橋本氏はそこへ足を運んだ。郷土史の学習過程で、橋本氏は今井祇園祭に対する歴史的価値を自覚し、八ツ撥行事復活の実行を決意した。この橋本氏の決意を今井西町の住人たちは許容した。また復活を実施する上で神事としての側面から住人たちが確信を持ってない点は、今井津須佐神社・宮司の判断を仰いだ。以上のように、八ツ撥行事の復活は、橋本氏を軸としてみた場合、①知識を習得及び情熱を維持する場(=郷土史学校)、②実行を受け入れる人たち(=今井西町の住人)、③正統性を付与する人物(=宮司)、という三点がかみ合った末に成立した共同作業であるといえる。

八ツ撥復活から現在に至るまでの間にも、今井祇園祭をめぐる実践には様々な変化が訪れる。例えば、1988 年(昭和 63)には組織の改編が行われ、当前制から会長制へと移行した。これはリーダー職の権限を分散することで、当職の負担軽減を目指したものである。さらにこの時期、今井西町の住人たちの多数が勤め人となったことを反映して、休日を考慮しない祭礼日程に対する不満が高まってきた。そこで住人たちは今井津須佐神社の宮司に、日程の改編を交渉したが、意見が対立してしまい、上手く進まなかった。しかし 2002 年には、宮司が譲歩し、休日を中心とした祭礼日程と

なった。他にも今井祇園祭の行事工程の簡略化などが見受けられる。このような状況は、人びとが置かれた社会的状況の変化により、今井祇園祭をめぐる実践のズレが拡大したために生じたものであるといえよう。例えば住人たちの生活においては勤め先の重要性が増し、祭りの実践への関与の度合いを下げざるを得なかった。その解決策として、組織改編や日程の変更などを行った。このような解決策は、組織改編のように波風を立てず終わる場合もあるが、日程の変更のように住人たちとは異なった社会的な状況に置かれた宮司の実践と食い違う場合も出てくる。以上より、八ツ撥行事復活以降から現在に至るまでの時期は、今井祇園祭をめぐる実践のズレが、祭りと関係する多様な立場の人たちの中で生じた時期である。

そして 2007 年にかつて祭りを担っていた地区である元永にて「元永山笠復興会」が結成され、今井祇園祭に新たな風が吹き込まれた。元永山笠復興会の発起人は、片山豊嗣氏(39)であり、現会長である。彼を中心として結成された復興会の一番の目的は「元永山笠を復興することを通して地域や祭りを活気づける」というものである。そのために橋本氏との連携や、技術習得や知名度の向上を目的とした他の祭りの青年会との関係の構築を行っている。このように、元永山笠復興会は地元の知識人や他の地域の青年会などとのネットワークを積極的に創出しそれを活用することで、周囲を巻き込みながら、新たな実践を生みだしている。

以上、1960 年代以降の今井祇園祭をめぐる実践の記述を、地元の知識人やリーダーに注目しながら、行った。彼らは、中断した八ツ撥行事の復活や元永山笠復興会の結成など、今井祇園祭を存続させるための数々の行動を起こしてきた。しかし今井祇園祭の実践を支えているのは一部の地元の知識人やリーダーだけではない。そこには、彼らの決定やけん引を受容できるだけの普通の住人たちがいなければならない。そのような普通の住人たちに、「祭りを存続させる方向へと働く力」が内包されていたといえよう。

4. 今井祇園祭をめぐる記憶

第 2 章で主題とした、主な実践の事例はすべて過去の出来事である。従って、当時の「存続へと向かう力」を内包していた住人たちの中には故人も多く、現在の今井祇園祭では中心的な存在ではない。彼らは、丁度、現在の担い手たちの親の世代に当たる。そして現在の

中心的な担い手となっている世代とその上位世代とでは、成長していく中で置かれた状況が決定的に異なる。

この点に留意しながら、本章では現在の中心的な担い手たちの記憶の語りから、①1950 年代後半から 1960 年代半ばの今井祇園祭がいかに住人たちに経験されていたのかということの理解と、②その当時の祭りの経験を受けた現在の世代がその後の人生をどのように辿りなぜ現在の祭りに参加したのか、という問題を考察する。

まず、当時の今井祇園祭の規模は大きく、特に大祭二日目の参詣行事である「夜祇園」では、行橋市を超える様々な地域から人びとが祭りに訪れていた。そこでは、今井祇園祭を中心として、普段は触れ合わない多くの人たちとの共同の体験が生まれ、地域全体が非日常としての時間及び空間として経験されていたと考えられる。

そして目を今井西町内に落としてみれば、20 日間にわたる今井祇園祭における、小若衆や青年会といった年齢階梯組織は、竹沢尚一郎のいうような「身体技法と集団行動の学習の場」[竹沢 1998: 37]としての機能を果たしていたということがわかる。そこでは、住人たちが、祭りにおける様々な技法や作法並びに、町内の力関係や集団で生きるための知恵などを学んでいたと考えられる。以上より、当時の住人たちは、今井祇園祭を担うことを当然のこととして捉えていたと考えられる。というのも、当時の住人たちには、年齢階梯集団という継続的に祭りに関わるための仕組みが用意されており、祭りと人生とは切っても切れない関係にあったからである。従って、当時の住人たちにとって人生と祭りとは不可分の関係にあったといえる。すなわち祭りは人生に埋め込まれていたと考えることができる。

しかし、人生と祭りとが不可分な関係として経験された時代は、今井東町の今井祇園祭からの撤退により終わりを告げる。以降、小若衆や青年会が祭礼時期に組織されなくなり、継続的に祭りに関わるための仕組みは失われてしまう。現在の担い手たちは、小若衆としての経験は持つものの、従来であれば青年会に加入する高校卒業時に、青年会が組織されなくなった世代である。従って、現在の担い手世代の多くは、子どもの頃に祭りの濃密な時間を経験しているが、高校卒業すると同時に勤め人となってからおおよそ数十年の間、祭りとの直接的な関わりを失っている。では、なぜ数十年のブランクを経て、現在の担い手たちは、再び今

井祇園祭をめぐる実践へと参加するようになったのか。この問いを、今井西町の住人三人を例に挙げ、記憶と人生という視点から考察する。

今井西町の住人三人は、いずれも子ども時代の一番の思い出として今井祇園祭における小若衆の活動を挙げてくれた。しかし彼らが中学生・高校生・社会人になるにつれて祭りからは疎遠になり、直接的な関わりを失っていく。その要因の一つとして、年齢階梯制に基づく青年会などが組織されなくなったことにより、継続的に祭に関わるための仕組みが失われたことが挙げられる。それでも、三人の記憶は途絶えることなく、祭りへの参加が当然のこととして育ってきた上位世代の人たちとの関係により、育まれてきた。恐らく、その過程で彼らは祭りを「わがこと」として捉えるようになったと考えられる。そして近年退職などを契機として、再び今井祇園祭に参加するに至る。しかし、数十年來の祭りへの参加は、彼らの記憶の中にある祭りとはかけ離れたものとして受け止められる。すなわち彼らは現在の祭りと記憶の中の祭りとの間のズレを感じているのである。それでもなお、彼らは親を代表する上位世代との関係で育まれてきた記憶を頼りに、過去と現在とのズレを埋めるように語る。

以上、記憶を通して今井祇園祭の過去の在り方と、現在の担い手たちの実践とを繋げるよう試みてきた。彼らは子ども時代に、祭りを中心として生活を送ってきた。しかし小学生以降は、年齢階梯組織の崩壊などにより、彼らは祭りとの関わりを失っていった。それでも、現在の世代は、彼らの上位世代との関係を通して、子ども時代の今井祇園祭の記憶を現在に至るまで育んできた。そうして半ば無意識化された記憶により、現在の世代はどうしても祭りの実践へと関わってしまうのである。

5. 今井祇園祭をめぐる記憶と実践

本論では主に 1960 年代以降の今井祇園祭をめぐる記憶と実践という主題を考察してきた。本論を振り返ってみれば、今井祇園祭の歴史は、様々なズレを孕みつつも、それを受け止めながら実践を繋げてきた人びとの歴史であるように思われる。

それぞれの世代が、それぞれの問題と直面しながらも、どうにかして今日まで存続させてきたものである。そこに共通している点は、祭りを担うということがどの世代において切実な問題だったということである。

上位世代の住人たちは、祭りを担うことが「当たり前」である故に、勤めが中心になりつつある日常生活と祭りとの折り合いをどうにかしてつけようと奮起してきた。それは八ツ撥行事の復活や組織改編など、「祭りを存続させる方向へと働く力」の源泉となってきた。また、現在の世代の住人たちは、上位世代との関係で蓄えられてきた記憶を背後に、過去の祭りと現在の祭りとの間のズレを埋めるべく語り、どうしようもなく祭りの実践に参加してしまう。さらに元永山笠復興会は、過去の楽しい記憶とは相反して廃れていく祭りと地域を憂いながら、過去と現在との間の溝を埋めようとしている。

以上のように、今井祇園祭は、祭りを担うことに対する切実さを抱いた、それぞれの世代の実践や記憶を反映して、今日に至るまで歩んできたといえよう。

6. 主要参考文献一覧

アルヴァックス, M.,
小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社, 1989(1950).

今井祇園行事調査委員会編
『今井祇園行事』行橋市教育委員会, 2002.

竹沢尚一郎
「都市祭礼としての博多祇園山笠」『季刊民族学』84号 国立民族学博物館監修 pp.8-45, 1998.

中野紀和
『小倉祇園太鼓の都市人類学 記憶・場所・身体』古今書房, 2007.

行橋市史編纂委員会編
『行橋市史 上巻』行橋市, 2004.

行橋市史編纂委員会編
『行橋市史 中巻』行橋市, 2006.

行橋市史編纂委員会編
『行橋市史 下巻』行橋市, 2006.

レイヴ, G., ウェンガー, E.,
佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習』産業社, 1993(1991).